

# 桃山時代の工芸について

奥平 志づ江  
新名 照美

## 1. はじめに

最近京都国立博物館で「桃山時代の工芸展」を見学する機会に恵まれ、多大の感銘と興味を覚えたので、テーマの広さを顧みず、桃山時代の工芸について展示構成の順に、その概要を説明する。

桃山時代は半世紀余りの短期間ではあったが、室町時代末期より開けた海外貿易やキリスト教の伝来にともない町人の社会的地位が向上し、西欧文明の流入により美術工芸が飛躍的に発展した時である。西欧の意匠をとり入れた華やかな南蛮文様もこの時代の工芸品一般に見られる特色であるが、またこれとは対症的な我が国独特の美意識といわれる「わび」も利休の茶道を媒体としてこの時代の工芸品に表現された特徴である。

## 2 武将の装い

桃山時代の武装の特色は甲冑に見られる奇抜な意匠と豪華な美しさで、甲冑の一部分に金や銀の箔押しをしたり、七宝、高肉彫、象嵌の「つば」が流行した。その頃、異形の兜や華麗な甲冑に武将が身を固めたのは、単に戦場の晴姿というよりは、むしろ合戦の中であって自己の存在を誇示し、敵を威嚇するためであったと考えられる。

また簡略化した武装に陣羽織、胴服といういでたちも、この時代に始めて登場した軍装である。防雨防寒など実用的な陣羽織は渋紙、麻、綿などで作られ、装飾的なものには鳥毛、獣皮、南蛮渡来のビロード、ラジャが素材に用いられた。このような軍装の登場は、旧来の慣習を打破しようとする革新的な時代の風潮を反影するものと言えよう。

## 3 遊楽の意匠と生活の華

信長、秀吉によって天下が統一され、永い戦乱の時代が終ると、人々は遊楽を生活の中に求めるようになり、諸種の遊戯が流行した。その代表的なものにカルタがある。双六盤、碁盤、百人一首などもこの時代に南蛮渡来のものと結びついて和風

に転化したものである。

また室町時代に大成した能楽は信長、秀吉、家康等、能好みの後援者を得て隆盛し、この時代に不動の地位を占めた。室町時代の能装束が淡白で格調高いのに比べ、桃山時代のそれは伝統にとらわれず、高級な裂地を用いた華麗なものであるが、小袖がそのまま用いられているので能装束から初期の小袖の様相をうかがい知ることができる。

平安時代中期には、小袖は宮中の礼服の下着であったが平安末期から鎌倉時代にかけて庶民の衣服となった。桃山時代には秀吉の豪放華麗な趣味が天下を風靡し、小袖も非常に派手なものとなり、刺繍と摺箔や辻が花染（絞り染）と描絵を施した文様表現の技法がその粋を競った。

住宅建築には前代の書院造りが普及し、大名の居館もほとんど書院造りの様式にならって作られた。西本願寺の飛雲閣は当時の様式を代表している。

飛雲閣の室内はことごとく中国絵画の流れをくむ狩能派の華麗な障壁画で飾られている。この期の障壁画は濃絵という手法で描かれ、極彩色で豪華なものである。

武家住いの調度にも従来の公家調度に種々の工夫が加えられ、その種類も増え、形式、文様、意匠の面にもこれまでにない新鮮味が際立ってみられる。

#### 4. 東西文明の交流

天文12年（1543年）にポルトガル人が種子島に漂着して、鉄砲、大砲が伝来したのを契機に、ヨーロッパ人が続々と渡来して東西文明の交流がさかんになった。

天文18年（1549年）には、キリスト教の伝来とともに各所に教会が建ち、その後、信者の増加につれて、桃山時代には蒔絵祭具の製作がさかんになった。

また我が国で採掘された銀とヨーロッパの染織品との交易も行われ、屏風、刀剣、蒔絵などはヨーロッパ人に好まれて数多く輸出された。

#### 5. わびの世界と食生活の彩り

桃山時代の茶の湯は、利休好みや織部好みの新しい作為によって特色づけられる。

利休の茶は政治権力と結びつき乍らも心の茶として求道的な面が深い。天正14年頃は利休の茶の最盛期で、草庵風の茶室、簡素な茶道具を通して利休の思想を知ることができる。利休の茶は宗易形の茶碗に象徴されるように、思索的で彼岸性の強いものであるが、これに対し織部の茶は沓形の茶碗にみられるように自由な作為

によって自らを強調した現世的、行動的なものといわれる。

茶道にともなう懐石料理は本来禅林風の簡素なものであったが、桃山時代に至って数寄をこらした客膳料理として完成されたといわれる。茶道書「南方録」に「小座敷の料理，汁一つ，菜二つ，三つ，酒も軽くすべし，佗び座敷の料理だては不相応なり，勿論取合ごくりすきことは，釜の湯同前の心得なり」とあるように，懐石料理はよほど簡素であった。また織部の茶は遊びの茶ともいわれ大衆の好みにあつて，茶道人口の増加を促した。名物茶道具を多く持っていることで信長や秀吉は天下人としての権威をほこっていたと思われる。

慶長（1600年頃）以降，織部をはじめ美濃，伊賀，信楽，丹波，備前，唐津焼等の陶磁器の製作が栄え，諸種の飲食器が食卓をにぎわすようになった。しかし飲食器の主流は依然として塗りもので，前代からの黒漆，朱漆塗の無文の器と共に蒔絵が流行し，黒漆の地に菊，桐紋の金蒔絵の膳，草花散らし蒔絵の薬味壺，薄朝顔蒔絵食籠，水草蒔絵の徳利など，食器類も華麗なものとなった。

## 6. むすび

以上桃山時代の工芸を主題にして概説したが，一口でいえば桃山時代は，それまでになく文化の花が華やかに咲き乱れた時代であるといえよう。その推進力となったものは，表には東西文明の交流であり，裏には権力者の欲望，戦乱からの解放感，宗教の権威である。西欧文明の影響は美術工芸品に最も多く現れているが，これは文化全体に亘ることであり，社会経済の充実と町人の社会的地位の向上は必然的に招来された結果である。またこの時代の工芸品の特色はそれ以前の大衆文明の影響を含む日本的なもの，西欧文明が融合して独特の味を出していることであろう。この事は美意識の表現，いい換えれば当時の工芸品の意匠から容易に知ることができる。

最後に工芸とは直接関係はないが，この時代で特記すべきことは，キリスト教による封建社会からの解放のきざしをみたことである。しかし，権力の崩壊を恐れる秀吉によってキリシタンは弾圧され，信教の自由と基本的人権を守ろうとする民衆の抵抗は，潰え去ったのであるが，民主的な思想革命の一頁を歴史に刻んだことはたしかである。

## 参 考 文 献

1. 桃山時代の工芸品 京都国立博物館

2. 工芸と文明 吉田光邦 日本放送出版局
3. 歴史 福地重考 日本大学通信教育
4. 日本の服飾美術 東京国立博物館
5. 風俗(第17巻4号) 日本風俗史学会会誌
6. 被服文化№115 被服文化協会